国立病院看護研究学会 編集委員会企画 交流セッション

現場発の看護研究が実践を変える
－小さな疑問を問いに変え、実践知として積み重ねる－

2026 年 12/18（金）18:30～19:30 TKP ガーデンシティ仙台(ハイブリッド開催)

座長：原口昌宏（編集委員会委員・東京医療保健大学）
演者：角森亮介（編集委員会委員・
PwC コンサルティング合同会社）

看護研究は、特別な研究者だけが行うものではない。臨床現場で生じる小さな疑問や課題を振り返り、実践をよりよくするための知見として整理し、他者と共有することから始まる。日々の実践には、「このケアは患者にとって本当に望ましいのか」「なぜこの業務はこの方法で続いているのか」「うまくいっている実践を他の部署でも活用できないか」といった多くの疑問がある。これらを問いに変え、実践を振り返り、得られた知見を共有・発信することは、看護実践の質向上や業務改善、看護職の専門性の発展につながる可能性がある。

一方で、研究テーマの設定、研究方法の選択、データの収集・分析、倫理的配慮、論文化や発表には様々な難しさがあり、研究への第一歩を踏み出せない看護職も少なくない。また、看護研究が、一部の研究経験者や意欲のある個人の努力に依存している現状もある。研究を個人の自己研鑽に委ねるだけでは、継続性や組織への成果還元に限界がある。

本交流セッションでは、編集委員会委員であり、コンサルティング業界でも勤務する角森委員から、臨床現場で生じた小さな疑問をどのように問いに変え、研究・実践報告・業務改善等につなげていくのかについて話題提供する。

さらに、看護研究を個人の努力で終わらせず、組織として実践知を積み重ねていくために必要な支援や仕組みについて検討する。具体的には、病院として看護研究に何を期待するのか、研究活動に必要な時間や人材をどのように確保するのか、大学教員等の外部支援者とどのように協働するのか、研究活動をどのように評価するのか、さらに研究成果を実践や組織の意思決定へどのように還元するのか、といった論点を取り上げる。

後半では、座長と演者との対談および参加者との意見交換を行う。看護管理者、臨床看護師、教育担当者、研究初心者、看護教育者等、多様な立場の参加者が、自施設における看護研究の目的や支援体制を振り返り、研究活動を個人の自己研鑽にとどめず、組織の学習活動として継続するための方策を考える機会としたい。

また、翌日の国立病院看護研究学会学術集会は、本学会最後の開催となる。本セッションを通して、これまで学会が培ってきた看護研究の文化や学術活動の意義を振り返るとともに、学会閉会後においても、現場から生まれる疑問を研究につなげ、その成果を実践へ還元する姿勢が継承されることを期待したい。

本企画は、学会が培ってきた看護研究の理念や実践知を次世代へ継承することを目的として、国立病院看護研究学会編集委員会が企画した。

○会場・オンライン準備の関係上、交流セッション参加申し込みフォームで、事前登録をお願い致します。このフォームの中で、座長・演者への「事前質問」も受け付けしております。
○また、セッション当日は右の二次元コードの読み取りまたはこちらのリンクから、「Slido」というオンラインアプリで質問を投稿できます。匿名でも可能ですので、ぜひご利用ください。

【当日の質疑応答用 QR コード↓】

【企画】編集委員会 委員：
委員　　原口 昌宏(東京医療保健大学)
委員　　角森 亮介(PwC コンサルティング合同会社)
委員　　黒田 美徳(東京病院)
編集理事 綿貫 成明(国立看護大学校)
編集理事 窪田 明子(北海道がんセンター)
理事長　 飯野 京子(国立看護大学校)